

山奥に暮らそう

WELBOX

20th
ANNIVERSARY

リモート ライフを 快適に!

絶景&グルメ旅
兵庫特集

WELBIZ特集

「ハウ・レン・ソウ」を 「ザッソウ」に

WELキーパーソン

武豊

介護対談

もし明日、親が倒れても慌てないために、考えておくこと

医療も介護も、大切なのは親御さん自身の笑顔です

介護を考えるうえで、切っても切れない関係にあるのが医療・看護との連携。在宅診療がご専門の小澤竹俊先生と、川内潤さんがそれぞれのお立場で意見交換しました。

元気であることを目指すとつらい介護になりがちに

川内 介護と病気については、たとえば代表的な疾患である認知症の場合も、進行を遅らせることは可能ですが、現状でこれを「治す」ということはできません。それでも家族には「元の元氣な親に戻ってほしい」という強い思いがあり、そのことが結局、ご本人と家族の双方を苦しめているように思います。

小澤 そうした点は、気長に付き合うべき心臓や血管などの慢性疾患、手術が難しい高齢者のガンなども同じで、完治に至らない場合が多いのが正直なところですね。しかしながら、日本の現在の医療はとにかく「元氣であること」をゴールにしがちなため、家族も親御さんに無理をさせてしまう傾向があります。

川内 たとえば、ご高齢のうえに脳梗塞で歩くのもままならないお父さんに、厳しいリハビリを課して、

親子が涙ながらに「頑張ろう」とつらい思いをしていたりします。生活上で必要な動作の中で、無理のないリハビリはもちろん大切ですが、かつてのように歩くのはやはり無理な話で、そうした点は、介護のプロに意見を求めたらうと、つらい介護を背負わずに済むのですが……。

「病気に負けるな」でなく本人が安心できる声掛けを

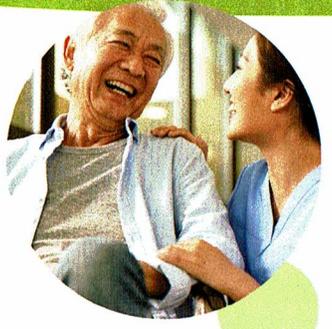
小澤 その点、医療はまだまだ「病気に勝つこと」を第一に考え、患者さんと家族に無理強いをしがちな点が問題です。重要なのは、本人が最期まで笑顔でいるためにどのような「ゴール」を目指せばいいかという点で、そのためにも医療、介護、そして家族の全員がひとつのプロジェクトマネジメントととらえていく。そんな姿勢が親御さんの尊厳を大切にし、家族の幸せにもつながるのではないのでしょうか。

川内 ビジネスパーソンの方は日常

多様な選択肢を考慮して前向きな視野をもつこと

小澤 コロナ禍で従来の画一的な働き方が見直されて、社会や企業に多様性という視点が根付きつつあるのは大変いいことです。在宅介護と医療は常に感染のリスクとのバランスを考えなければなりません。が、「在宅だから介護を頑張る」のではなく、介護や医療の訪問スタッフとより緊密な連携を築いてもらいたいと思います。

川内 たとえば「イサービス」にしても、本人には生活のハリになっている場合もあり、「概して不要不急として通わない選択をするだけが正しいとは限りません。その意味で、正解はありませんが、地域包括支援センターをはじめとする公助に加え、会社や地域の支援という共助の面で、選択肢そのものは確実に増えています。ご家族には、前向きに視野を広げていただきたいと思います。



めぐみ在宅クリニック 院長

小澤 竹俊 Taketoshi Ozawa

東京慈恵会医科大学医学部医学科卒業。山形大学大学院医学研究科医学専攻博士課程修了。救命救急センター、農村医療に従事、横浜難生病院ホスピス病棟長を経て、2006年めぐみ在宅クリニックを開設。在宅医療と緩和ケアのエキスパートとして、メディアへの登場も多数。



「死を前にした人にあなたは荷が重いですか？」小澤竹俊 著
看取りの現場でできるのは、ただ相手の心の支えになること。気持ちに寄り添う介護のあり方を考えるうえで貴重な本。



「もし明日、親が倒れても仕事で済ませる方法」川内潤 著
親の面倒は子だけが見るべき？ 介護のプロが、介護で本当に大切な心構えと任せ方をやさしく紹介。



NPO法人となりのかいご 代表理事

川内 潤 Jun Kawauchi

上智大学文学部社会福祉学卒業。老人ホーム紹介事業、外資系コンサル会社、在宅・施設介護職員を経て、NPO法人「となりのかいご」を設立し、現職。ミッションは「家族を大切に思い、一生懸命介護するからこそ虐待してしまう悲劇を絶つ」こと。